

総合討論

総合討論では、司会の中島(東京大学気候システム研究センター)を交えて、講演内容を前提として将来への課題について議論された。その中で、マルチスケール・マルチモデルの開発や、1 km 程度の格子サイズのモデルなどの開発が重要であることが共通意見として出された。海洋に関しては10 km の渦分解は重要であるが、さらに課題に応じて1 km 以下の高解像度モデルが必要であることが会場からも指摘された。このような高分解能モデリングへのトレンドのなかで、次期の超並列スーパーコンピュータに対する期待が寄せられた。また、雲システムの組織化の研究のために雲物理学・境界層気象学・大循環力学を組み合わせることや、地球システムの理解のために物理・化学・生態過程を組み合わせるなど、クロスオーバー的な研究がこれから発達してゆくだらうと言う意見が出された。さらに、米国、欧州、日本におけるモデル開発体制の違いにも話が及んだが、適度な多様性をもつ複数のモデルが開発される状況が健全な発展のために必要であることで意見が一致した。観測システムで今後、必要とされるものとして、レーダーネットワーク、大気物質や長寿命ガスの観測網、衛星観測網の確

立などが挙げられたが、さらに地上観測と衛星観測の両方を組み合わせたデータ解析の重要性が指摘された。

最後にそれぞれの講演者の強調したい点を語ってもらった。植田博士からは、ポストドク問題を改善して若手が安心して研究できる環境の確立の重要性が訴えられた。増永博士からは、異なる分野や解析手法を組み合わせた研究の推進が重要であることが強調された。上田博士からは、国際的な仕組みを含むデータ流通の改善とデータ利用が自由にできる仕組みの確立が訴えられた。Golding 博士は、複合課題研究や積雲対流研究の重要性を指摘した上で、若手が1つの狭い研究テーマに閉じこもることなく、広い視野で研究を進めるべきであると言うアドバイスを送った。最後にBrasseur 博士は、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)に対して各国から非常に多くの意見が出されていることを例にあげて、地球科学が現在、様々なデータと研究基盤が実現された「Golden Time」を迎えていることを指摘し、次世代の研究者がそれをエンジョイし、さらに発展させてもらいたいという激励の言葉を述べた。